

教員養成における学生の主体的な正課外活動の意義

——広島文教女子大学初等教育学科生による自主サークル“はぐくみ”の取り組み——

本畝 瑞歩*・白石 崇人**・森 哲之***・田邊日向子*・福田 聡子*
峰谷日菜子*・森 望美*・山本 祐理****

The Significance of Student's Independent Extracurricular Activities in Teacher Training:
Efforts of the Voluntary Circle, "Hagukumi", By Students in Association
for Educational Science at Hiroshima Bunkyo Women's University

Mizuho MOTOUNE*, Takato SHIRAISHI**, Tetsushi MORI***, Hinako TANABE*,
Satoko FUKUDA*, Hinako MINETANI*, Nozomi MORI* and Yuri YAMAMOTO****

はじめに

本論文の目的は、教員養成における学生の主体的な正課外活動の意義について、広島文教女子大学初等教育学科生の有志による自主サークル“はぐくみ”の取り組みを通して明らかにすることである。

現代日本において、大学における教員養成の制度や実践は大きな転機を迎えている。国の教育政策は、大学の職業教育的機能を強化し、教員養成課程の実質化を図ろうとしている¹⁾。各大学において、教員養成のあり方を模索する必要性はますます高まっている。

大学の教員養成課程を担う教育学者たちは、即物主義・技術主義な教員養成の問題性を指摘し、学生自らが教育問題を考えるための批判的思考を育成することなどを主張してきた²⁾。また、教職課程における学生の主体的活動に注目して、アクティブラーニングや将来の進路に関

連づけた教育を探究している³⁾。今、教員養成では、どうすれば単なる知識や技術の伝達に陥らず、学生の主体的活動を引き出して深い学修を実現するかが問題になっている。これらの先行研究は主に正課活動についての研究であり、大学・課程運営側の計画枠内での活動である。しかし、戦後に始まった「大学における教員養成」理念は、教職課程の科目だけでなく、教員になる過程における大学生生活全体を通しての学びや人的交流の効果に注目して成立した一面があった⁴⁾。そのため、大学における教員養成のあり方を考えるには、学生の正課外活動にも注目する必要がある。教員志望の学生たちが、正課外でどのような主体的活動を行い、どのような学修を行っているか。学生たちは、自分が教員になっていく過程にその活動をどのように位置づけているか。

以上の問題意識に基づき、本論文は、教員養成における学生の主体的な正課外活動の意義について、学生の経験を通して考察する。そのために、広島文教女子大学初等教育学科35期生の有志による主体的な正課外活動に注目し、この活動に関わった学生たちの経験や自己評価など

* 本学初等教育学科35期生

** 本学准教授

*** 本学教授

**** 本学初等教育学科34期生

を資料にする。これによって、学生たちが主体的な正課外活動から何を学修したか、教員になる過程の中に自らの活動をどのように位置づけているか、正課の活動とどのように関連づけ、学修経験を補充・深化あるいは発展・批判するようになるかなどを検討する。また、これらの活動を大学教員がどのように支援できるかについて、同期生チューターの取り組みを通して検討する。(白石)

1. “はぐくみ”の取り組み

(1) “はぐくみ”の結成と活動

自主サークル“はぐくみ”は、2016年5月に初等教育学科35期生の本畝瑞歩が「教員志望の学生のための勉強会」を35期生に呼びかけたことから始まる。このとき、本畝は参院選や平和をテーマにした勉強会を企画し、学び合おうと呼びかけた。そこに集まったのが、同じ初等教育学科35期生の田邊日向子、福田聡子、峰谷日菜子、森望美の4名であった。その後、数度にわたって様々なテーマで勉強会を進めた後、同年11月に安芸高田市で行われた「みんなの学校」上映会・木村泰子氏講演会に参加した。この会の内容と、その後の木村氏との対話とに触発され、5人のメンバーは、自分たちの活動に“はぐくみ”という名前をつけた。これが“はぐくみ”誕生の経緯である。その後、34期生の山本祐理と、37期生4名がメンバーに加わった。現在は、合計10名(4年生6名・2年生4名)で活動している。表1は、“はぐくみ”の活動の概要を示した年表である。

表1 “はぐくみ”の活動概要

月 日	“はぐくみ”の活動概要
【2016年】	
5月	本畝が「教員志望の学生のための勉強会」を呼びかける。

	プログラム育心において「教員志望の学生のための勉強会」を呼びかける。(主題：参院選に行こう)
7月14日	勉強会。峰谷、本畝が「戦争をどう教えるか」をテーマに考える。
8月6日	田邊、本畝が平和記念式典に行く。碑めぐり。「はちろくトーク」への参加。
8～11月	勉強会を重ねる
11月27日	安芸高田市甲田で行われた「みんなの学校」上映会と木村泰子氏の講演会へ参加。 →木村氏の出待ちをして、ともに芸備線で帰路につく間話す。大空小学校にいてみようと思い始める。 →「はぐくみ」という名前をつける。
12～1月	勉強会を重ねる。
【2017年】	
2月5日～	メンバーが大阪市立大空小学校を訪問。(3日間) →東京大学大学院博士課程1年(当時)の二見総一郎氏と出会う。
4月～	プログラム育心で“はぐくみ”の取り組みを何度か話す。他の学年の育心でも話す機会をいただく。→1年生(37期生)の学生4人が活動に興味を持ってくれる。
5月	平成29年度前期文教チャレンジ補助金の交付を受け、「みんなの学校」上映会・木村泰子氏講演会の準備を開始。
7月	田邊、峰谷、本畝で東京大学大学院小国ゼミに訪問。→1970年代の障害児の就学問題について考えている場に参加。
9月10～15日	メンバー5人で大阪市立大空小学校を訪問(5日間) →全校道徳、バースデーメッセージ集会、保護者の会などを見学。
【2018年】	
2月	1年生4人と本畝が大空小学校へ訪問。
3月10日	映画上映・木村泰子氏講演会「みんなの学校 ～10年後の教育を考える～」の実施→はぐくみメンバー8名(10人のうち2名は海外のため当日不在)と学生ボランティア15名で運営。
9月	本畝、田邊、森の3人が大空小学校へ訪問

出典 本畝瑞歩「「はぐくみ」の流れと本畝の思い」
2018年5月11日付レポートを参照して作成。

“はぐくみ”は、2016年5月から現在まで、自身の勉強会を含め、3年間にわたって活動を続けてきた。教職員は、“はぐくみ”の活動報告の機会を提供したり、活動の環境整備などをわずかに支援したりしたが、構想・結成に関わったことはない。“はぐくみ”は、学生が自主的に始めたサークルであった。活動を始めた時の中心人物であった本畝は、“はぐくみ”を構想した理由について次のように述べている⁵⁾。

大学は最高学府であるからこそ、学びたい人が集っていると思っていた。私の感覚と実際の光景はかけ離れており、学びに向かう態度が表れていると「意識高い系」と揶揄された。そのなかで居場所がほしかったのが、一番の理由といえる。やりたいことをやっていて、高めあえる存在がほしかったのだ。大学2年生の春から悶々としていた思いをぶつけてみると、案外すんなり受け止めてくれた。周りを見る目が変わった瞬間でもあった。

仲間が集まったことは自分も含め、この大学にいる人たちのほとんどは大学受験に失敗したり、勉強をあきらめたりして来ているとばかり思っていた。そうではなかったし、自分自身が周りのことをうがった視点で見ていたのではないかと省みるきっかけとなった。

また、初期からのメンバーの1人である田邊は、はぐくみに加わったきっかけを次のように述べている⁶⁾。

私のはぐくみに入ったきっかけは、本畝さんが平和について教育について考える勉強会をしようとして誘ってくれたことである。まず、その時点では「はぐくみ」という名前はなかったが、初等教育学科35期生の5名が集まり、この活動に「はぐくみ」という名前をつけた。大学の講義以外でも自分たちの問題意識や視点から、平和について、教育について、また、教育だけでなく日々ニュースなどで疑問に思う社会の出来事などを考えたいと思い、この活動を始めた。

以上のように、“はぐくみ”は、学生自身の学びに対する欲求によって結成された。その背景

には、自分たちの問題意識や視点によって考えたいという学び・思考に対する学生たちの渴望と、それと大学の現実とのずれから生じた葛藤とがあった。

(2) 大空小学校に関わる活動の展開

“はぐくみ”の結成に大きな影響を与えたのは、大阪市立大空小学校のドキュメンタリー映画である「みんなの学校」の視聴と、元大空小学校長の木村泰子氏の講演であった。“はぐくみ”は、大空小について以下のように把握している⁷⁾。

大阪市大空小学校。ここでは、特別支援教育の対象となる子どもも自分の気持ちをうまくコントロールできない子どもも、すべての子どもたちが同じ教室で学ぶ。地域の住民、学生ボランティア、保護者らの支援を積極的に受け入れた「地域に開かれた学校」として多くの大人たちで見守れる体制を作っている。

学校の理念は「すべての子供の学習権を保障する学校をつくる」であり、大空小学校には、“自分がされていやなことは人にしない 言わない”というルールがある。

このように、“はぐくみ”は大空小を特別支援教育やインクルーシブ教育、地域に開かれた学校、すべての子どもの学習権保障に関する実践校として認識していることがわかる。“はぐくみ”のメンバーは、2017年2月、同年9月、2018年9月の3回、大空小訪問を実施した。第2・3回の訪問旅行では冊子をまとめて振り返りを行った。図1は、第2回訪問後の冊子である。

また、2018年3月10日には、“はぐくみ”の主催で「みんなの学校」上映会・木村泰子氏講演会「みんなの学校～10年後の教育を考える」を広島文教女子大学大講義室で実施した(図2)。“はぐくみ”は、この企画をもって広島文教女子大学の平成29年度前期文教チャレンジに応募し、審査の上採用となって、交付された補助金を準



図1 冊子「第2回大阪遠征」の表紙

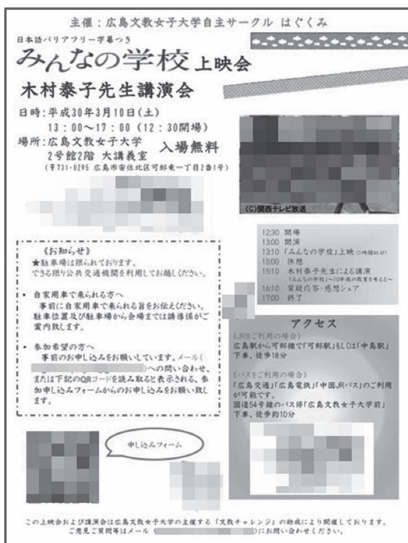


図2 上映会・講演会のチラシの一部

備に充てた⁸⁾。当日は、学生だけでなく、学内外から来場者を200人集めることができた。

(3) 大空小学校で学んだこと

大空小学校で“はぐくみ”メンバーが学んだことを総括すると、大きく4点に分けられる。

1点目は、多様性を受け入れることの大切さである。大空小学校は、「大阪市立大空小学校」

という名前の通り、公立の学校であるだからこそ、様々な事情を抱えた子どもたちの居場所となっている。しかしながら一般的な公立学校では、障がいに関する医学的診断を受けて、通常学級ではなく特別支援学級への移籍や特別支援学校に行くことを勧める様子や、外国籍の児童生徒に対しては、取り出し授業を行う現状もある。そのような現状から逃れて大空小学校へ転校してくる児童がいる。大空小学校に通う児童の多様性は、医学的診断による障がいの有無や出身の違いだけからくるものではない。家庭の状況や経済的な問題もある。そのような多様性の中で、児童一人一人が安心して生活できる小学校をつくらなければならない。子どもたちが逃げ出さなくて良い小学校が公立小学校のそもその姿である。公立小学校には、多様な子どもであふれていることが当たり前である。

2点目に教師に大切なものは柔軟性であることだ。学校現場では予定通りに物事は進まない。ともすれば、予定通りに物事を進めようとする事自体が教育の目的とずれているのではないだろうか。教育基本法の前文や第3条にも記されているように、ここでは教育の目的を一人一人が幸福になることとしたい。そのためには、何か問題が起きたとしても、授業や行事を予定通り進めることよりも、児童生徒にとって何が学びになるのかを見極めて行動することがもめられるのではないだろうか。

3点目に事実を見極めることの大切さである。2018年9月に大空を訪問した時、私たちゲストティーチャー（訪問者）が待機する場所に休憩時間ごとに訪れる5年生の女子児童がいた。私たちは、ゲストティーチャーと話したくて来ていると思ひ込み、「教室に戻って学習せん」と声をかけ教室に戻すことばかりを考えていた。しかし、その女子児童が私たちの元に来ていた

のは、いつも側にいてくれる支援担当の先生が休みで不安な気持ちであったからであった。このような体験から、子どもの行動の事実を見極めることが大切だと知った。「サボり」とみられる行動だけを見るのではなく、その裏にどのような不安定な心情が隠れているのか、どんな助けを求めているのかを考え、そして対処していかななくてはならない。

4点目に教師の専門性について考えた。教師の専門性は教科に関する専門的な知識ではなく、教育学ではないだろうか。広島文教女子大学の教員養成課程の講義科目は、教科教授法が主となっているように感じる学生もいる。具体的には教授法を学び、指導案を書き、模擬授業をすることである。しかしながら、教師にとって「教育学」が根幹であり、「何をどう教えるか」ではなく、「何を学ばせるか」が重要ではないだろうか。加えて現代の教員養成課程では「教師になって何がしたいのか」を考えさせることが十分ではない。ともすると、教員採用試験の面接対策のためにきれいな形にまとめられた、自分の言葉とは少し離れた「やりたいこと」を形作っているように感じた。教員になる学生が教育現場に赴き、活動をするものの意義は、「教員になって何がしたいのか」を自分の言葉でまとめることにあると考える。現場での授業を控え、張り詰めた緊張感の中で行う教育実習だけでは、このような学びは得がたかった。

なお、ここで重視する「教育学」は、学力重視や学力第一主義への批判によって成立している。特に小学校は、子どもたちが集団生活を学ぶ場である。全国学力・学習状況調査などを利用して、点数化された学力で学校や教師を評価しようとする動きがある⁹⁾。しかしながら、全ての教師が児童生徒の学力をあげるために教壇に立っているわけではない。教師は、子どもた

ちの「今」と「社会に出るとき」を考えて、子ども一人一人がどう生きていくのかを考えさせるために教壇で奮闘している。教師は子ども一人一人の将来の姿の「正解」を持つ事ができない。この「正解」のない教壇で、子どもたちにどう生きるのかを考えさせるところに、学校の教師の専門性が顕われるのではないか。それこそが教師の専門性としての教育学だと考える。ただ、教師を基点とした「教育学」ではなく、子どもを基点とした「教育学」であることがこれからの「教育学」に求められる。

以上のように、“はぐくみ”では、大空小訪問によって様々な学びを得た。“はぐくみ”の学生たちは、結成前に感じていた主体的な学びへの渴望と、それが与えられた教員養成の正課や環境から得られないという葛藤との解決を、大空小に関わる正課外活動を自ら企画・実行することで実現した。しかもその学びは、教育観・学校観・子ども観の更新や、教師の専門性に関する理解の深化、さらには自らの「教育学」を論じるに至っている。(本畝・白石)

2. “はぐくみ”の取り組みを通じた学び

“はぐくみ”の取り組みは、参加学生に様々な学びを生じさせた。その学びは、知識や経験はもちろん、自分の教育観や生活、将来像、正課の学びなどに及んでいる。大空小に関わる学びについては、先述の通りである。ここでは、最終学年に及んだ“はぐくみ”メンバー（初等教育学科34・35期生）の学びについて、全取り組みを振り返ってまとめたレポートから検討する。

(1) 教育観などに関する変化

“はぐくみ”の取り組みは、メンバーの教育観などの更新を促した。例えば、福田は、活動を通して感じた教育観の更新について、次のよう

に述べている¹⁰⁾。

はぐくみの活動を始める前は、自分が受けてきた教育が全て正しいと思っていたし、全員が同じ教室で学ぶことは難しいと思っていたが、実際に大空小学校に行ったり、はぐくみのメンバー内で意見交換をしたりする中で、自分の中の固定概念が崩れていき、変わり続けている社会の中で、これからの学校現場で求められる教育はどのようなものなのかを考えるようになった。

また、例えば、同じクラスに支援が必要な児童がいたら教師がその児童に付きっきりになってしまって他の子の学習が進まないという以前の自分は思うかもしれないが、他の児童もその児童のことを知り、理解するきっかけになり、教師の代わりに児童自らがその児童のために動き出すようになるため様々な力をつけることができる。個別で対応することも大切だが、一緒にいることで学びの場をつくっていくことの大切さも大空小学校に行ったことで気づかされたところだと思う。

また、峰谷は特に特別支援教育に対する考え方について、次のように述べている¹¹⁾。

特別支援教育については大きく視点が変わりました。特別支援学級を増やそうとする時代の流れに危機感を抱くようになりました。以前は、通常の学級に通う児童生徒にとっても、支援を必要とする児童生徒にとっても特別支援学級があることは良いことだと考えていました。しかし、学校で能力に応じて教室をわけることが、社会で障がいのある人とない人の間に大きな壁をつくることに発展する可能性があることに気が付きました。

森（望）は、活動前には「自分の中に教育観というものがあった」と述べながら、活動を通して感じた障がい観・子ども観に関する変化を次のように述べている¹²⁾。

以前の私であつたら「障がいのある」と言われる人に対して、心の奥底で哀れんだように見えていたり、関わり方が分からなくて動揺していた時もあった。どこかで自分を上の立場に置いて、「かわいそう」など勝手に弱者としてみていたのだ。本当にかわいそうなのは、私である。建前では「差別はいけない」とか「みんなどこ

かしらのコンプレックスがある」「特別な支援を要する人」などとカテゴライズし、負のフィルターを通していたのだ。障がいをなくして「普通」に近づけなければならないという考え方が差別や排除につながる危険性があるのだと、つよく痛感した。世の中の障がいという言葉が障がいでもあると思った。人はそれぞれに特別な存在であつて、各々に特別な支援があることが大前提にあるのに。これを子どもに置き換えたときに、子どもは本来、学び方は異なるもので、障がいというフィルターを通すと見えづらくなることが多々あると考える。そうすると、大人は自分の都合のよいように、子どもを区別化してそれに沿った対応を考えようとする。それがマニュアル化し、画一的な教育をするのだと感じる。それゆえに、「分かる」授業でないと感じる。それゆえに、子どもは大人をみてその場で「いい子」を取り繕うとする。

以上のように、“はぐくみ”の活動を通して、メンバーはそれぞれ教育や学校、子ども、障がいなどの観念を更新した。いずれのメンバーも、入学前からもっていた素朴概念や正課で学んだことを通して形成していた観念が、メンバー間の意見交換や大空小訪問によって崩れ、再構築される過程を経験している。特に、周囲や自分の中に見られる、人間を分ける考え方を相対化し、その問題性に気づいて、自分なりの展望を導き出している点は注目すべきである。

(2) 自分の学びや将来像に関する変化

“はぐくみ”の活動は、メンバー自身の日常や大学での学びの態度や将来像にも変化をもたらした。田邊は、意見交換や少しの興味による行動、取り組みが様々な気づきをもたらしたことについて、次のように述べている¹³⁾。

毎回事前に考えるテーマを決め、集まるたびに自分の考えをぶつけ合う中で、自分の中で深く考えたつもりでも友達の話の話を聞くと自分の解釈が違うように感じたり、新たな知識を得ることもできた。身近な社会の出来事や教育について考え、自分の意見を伝え合うことはと

でも新鮮に感じた。「みんなの学校」の上映会に足を運んだのも特別支援教育への少しの興味からであった。同じ教師を目指すものとして誘い合って、映画、講演会から共に学んだ。そこで映画の舞台である大空小学校の初代校長先生とお話する機会があり、自分たちの考えは画一的なものであると気付かされた。

山本は、思考の交換・共有を通じた気づきについて、次のように述べている¹⁴⁾。

私のはぐくみの活動を通して特に学んだことは、周りに目を向け、それを自分ごととしてとらえ、行動に移していくことである。はぐくみの活動の中で、定期的にメンバーと集まり、テーマをあげて話し合うことがあった。それはこれまで目を向けることのなかったことに目を向けるきっかけになったとともに、考えることを自分だけのものにせず、メンバーと共有し深め、発信することができた。はぐくみで学んだ「考え、自ら行動すること」はこれからも生かしていきたい。また、共に考え、学び、行動してきたはぐくみのメンバーとの出会いは、学生生活の中でとても貴重なものだったと思う。

森（望）も、取り組みを通して感じた自分の行動様式の変化について、次のように述べた¹⁵⁾。

以前の私は何か行動を起こすことに小さな恐怖を感じていた。それは、若干の周囲の目を気にしたり、頭で考えたりする想像することのみで、実際の行動は伴わないということだ。何か新しいものの変革を求めているが、他人任せで、心で願うばかりのそんな自分だった。しかし、はぐくみの取り組みをきっかけに少しの勇気をもつことと、どんな目的や目標でもいいから自分が思い描いていることや、挑戦したいこと、気になっていることを行動に起こしてみようと考えるようになり、少しだけではあるが体現するようになった。

福田は、意見交換の経験を通して、自分の行動や将来像が変化したことについて、次のように述べた¹⁶⁾。

木村泰子先生のお話を聞いて、意見が異なる人と対話を重ねることの大切さに気づかされた。

「みんなの学校」を上映した際にもインクルーシブ教育を推進したいと思っている方々とお話をする機会があり、色々な方と様々な視点で対話をしていく中で考えをより深めていくことができたと思う。また、自分の大学生活においても、色々な人の立場に立って考えたり、行動したりすることを心がけるようになった。

はぐくみに入って初めて触れる教育に関する話題もあり、もっと知りたい、学びたいと思えるようになった。そして、より一層教育者になりたい気持ちが高まった。将来教師になった時には、はぐくみでの活動で吸収したことを活かし、常に学び続ける教師でありたいと思う。

森（望）は、取り組みを通して自らの教職観の変化と、自分の将来像について、次のように述べている¹⁷⁾。

私は、小学生の頃から大学入学に至るまでは「学校の先生にはなりたくない。」と思っていた。[略] それゆえに、大学入学時から活動を始めるまで、周囲とのギャップを感じていた。「先生になりたい！」という強い思いをもった学友との差である。なぜこんなにも教員になりたいのだろうと不思議に思い、その理由を尋ねたりしていた。あまり感銘を受けるものはなかった。自分の教員像や教育像がなく、照らし合わせるものが欠如していたことも要因だと思う。[略] 木村泰子先生をお招きしての上映会と講演会では、教員の本質に迫った気がした。それは木村先生の「教科指導はこれからAIでも補える。十年後の社会で子どもたちが生きていくために必要なことは、生きる力。その生きる力を育てることが教員の務め。」というような言葉である。心底から、自分がこれからはずっと基盤であると感じているものが間違っていないという風に、あたたかく背中を押してもらえた気がして、すごく前向きなパワーをもらったのだ。大学入学時に抱えていた葛藤や今までのモヤモヤが晴れたように感じた。子どものすべてを取り囲む大人たちが共に社会で生きていくための仲間であり、教育者であると思っているが、教員は家族の次に間近で子どもたちを見守り、導く存在であるとき強く感じた。子どもが人間らしく生きていく力を身につけていくなかで欠かせない存在でもあった。そう考えると、教員は魅力的な職業であるなど、気持ちの変化が起こった。

以上のように、“はぐくみ”メンバーは、忌憚のない意見交換を通して、自分の学びの態度や将来像を変化させた。新しい知識を得ることはもちろん、視点の転換や多様化、思考の共有を経験し、学びへの意欲をさらに向上させ、考えを行動に移す勇気をもつようになった。また、その中で、自分の教師・教職像を振り返り、補強して、教職の魅力や「学び続ける教師」の具体的な姿を自分なりに見出すに至った。それから、子どもと大人がともに生きる社会のあり方について、自分なりの展望を持つに至った学生もいたところにも注目すべきである。

(3) 正課や大学生活に対する批判的視点

“はぐくみ”の取り組みは、学生たちがこれまで受け身であった正課や大学生活に対する姿勢にも影響した。峰谷は、自分の教育観の更新がもたらした影響について、次のように述べた¹⁸⁾。

「教育とはこういうものだ」と大学で教わったことを一面的にとらえ、大学4年間を過ごせば教員を目指すことへの葛藤は少なかったと思います。しかし大学から一歩外へ出て様々な価値観に触れたことで、「教育」が自分の中ですごく広い意味をもつ概念になり、「教員」という職に対する責任が重く感じられるようになりました。生活の変化としては、友だちと話す話題の偏りがなくなりました。

以前は観察実習や介護等体験に行くと、そこで体験したことを吸収して、見聞きしたことを鵜呑みにしていました。しかし自分の中で「理想とする教育」ができる「実習校がおこなっている教育」に対して批判的な意見を抱いてしまう部分が出てきました。大学生活で、様々な価値観に触れることが大事だと思い、大学の先生と対話をしたり、今まであまり話したことの無い友達と関わりを持とうとしたりすることが増えました。

田邊は、自分の学びに対する批判をふまえて、教員免許取得にとどまらない学びの存在に気づき、次のように述べている¹⁹⁾。

自分が知りたいと思ったことや疑問に思うこと、興味があることがあれば、積極的に動き、参加することは、新たな考える視点や知識だけでなく、そこでの出会いから次の学びの機会を得ることにつながるのだと実感した。これは、教員免許を取るためであるとか、資格を得るために動くのではなく、学びを自分から求め動くことでしか得られないと思う。そして、それは大学の講義に止まらないことを知った。免許取得のための科目になると、どうしても強制的な力があるためそこに学びの主体性がない場合もあると思う。

森（望）は、自分の学びについて批判を行って、教員養成の目的は教員採用試験ではないのではないかと疑問をもち、次のように述べた²⁰⁾。

ほんの微々たるものではあるが学生生活や大学の講義、日常の物事に疑問をもつようになった。例えば、近状で感じているのは、教員採用試験の勉強が手段ではなく目的となっているような違和感をおぼえる。(1) [教育観などに関する変化] で述べたことと重なるところはあるが、教育観や教員像という体系が明確でないなかで、教員になるための知識や技能を身につけなければならないところにやるせなさを感じている。そういった面から、一年次から幅広く教育について議論し考える時間や、他国との教育体制などの違い、社会から見た教育など様々なことについて触れる機会をもつべきであったと感じている。

本畝は、“はぐくみ”の取り組みを「アクティブラーニング」や「主体的・対話的で深い学び」とつなげて考え、次のように総括した²¹⁾。

[活動の中で] 自分の言葉を受け止め、批判してくれる人がいることが一番の喜びだった。それは違うんじゃないか、こういう考えがあるのではないか、などと話せる場となった。そのなかで学んだことは「主体的・対話的で深い学び」の本質ではないだろうか。

活動において、主体的であること及び対話的であることが目的になってはいけないことを知った。主体的に活動することが目的になってしまっただけでは、どう主体性を働かせるのかのみの活動になり、学びは少ない。ただ、主体的に活動することで得られる学びに焦点を当てると、受動的に学ぶ（一般的な「一方向の講義」）よりもはる

かに大きな知識及び技能が得られるだろう。これは対話的な活動においても同じように述べられる。これから求められている「アクティブラーニング」を自分たちで完成させたといってもいいのではないだろうか。そもそも「アクティブラーニング」が専門的な知識を活用する大学教育における教授学習法であることから、これを自ら取り入れられたことは、偶然の産物ではあるものの、誇れるところではないか。

以上のように、“はぐくみ”メンバーは、自分たちの学び合いに意義や喜びを感じながら、教員養成の学びとは何かについて考え続けていた。教員養成の学びは、教員免許取得や採用試験を目的としがちである。学生はそのために学んでいると考えがちであるし、教員もそのように働きかけてしまうことが多い。しかし、それは教員になるための手段でしかない。主体的・対話的に学ぶことを通して、教育・教職に対する理解を広げ、かつ深めていくことこそ、教員養成の学びの目的である。このことに、“はぐくみ”の取り組みを通して学生たちは気づくに至った。なお、主体的・対話的に学ぶことも手段でしかないと感じた学生がいたことにも注目すべきである。「どう主体性を働かせるのか」のみに偏ってはいけないという教訓を見出すことができる。これは対話的学びについても同様のことが言えるだろう。(白石)

3. 35期生チューターの支援

広島文教女子大学は各学年にチューター（学科内分掌として単学年の学生指導を中心に担当する教員）を設けている。35期生の第2～4学年次のチューターは、学生の正課外活動を他の学生に紹介する機会を積極的に設けてきた。“はぐくみ”の活動紹介もその一つである。

授業期間中の毎週水曜日には、全学で昼休憩後の45分間を使って「育心の時間」を設けている。この時間では、年8回、「プログラム育心」

を実施している。これは、「育心の時間」の目標である「自らの心を育て」、「人の心に働きかける力」を持ち、「やさしくあたたかい心で他者を思いやる」ことなどを目指して、同学科同学年の学生全員が集まり、チューターが進行するプログラムである。35期生のプログラム育心では、2年次から継続的に学生による自由なプレゼンテーションの機会を設定し、発表者を募ってきた。それによって、学生が日頃考えていることや活動していることを相互に知り、議論し、共有することにより、学生の中から新たな動きが生じていくことを期待した。

2年次では、プログラム育心ができる限り学生主体になり、学生のいいところを引き出して、高めていけるよう考慮した。3年次以降も、プログラム育心を学生が積極的に発表、情報共有できる場とした。学友会各局、クラブ、サークル、ボランティア、留学・研究会経験等について、学生が活発に報告・案内等を行った。その中で、“はぐくみ”のメンバーによる発表も行われた。同じ学生が他者の意見を聴きながら生き生きと主体的に活動していることを自由にプレゼンテーションする様子は、聴いている学生にも刺激を与えていた。毎回集めていた学生の感想によると、“はぐくみ”の発表後には、例えば、次のような感想が出された。

- ・「みんなの学校」を見に行ったら学生が報告をしてくれた。彼女たちの行動力にいつも感動とパワーをもらう。同じ教育を学ぶ仲間として尊敬した。
- ・この学年は、すごく色々なことに積極的に取り組んでいてお手本が身近にいて、すごく色々なことを学んでいます。
- ・堂々とプレゼンをされている姿を見て、鳥肌が立ちました。35期生の自分で考えて自分で行動したり表現したりする姿も本当にすごいと思います。とても刺激になります。
- ・毎回育心の時間になると感じますが、同じ学年の仲間が色々な活動を行なっていてすごい

と思います。自分たちで考え、行動し、自分の中だけでなく、周りの人へ伝えていくことは簡単ではないと思います。私も彼女たちのような素敵な人になりたいです。大きなことはできませんが、自分にできる小さなことから始めたいと思います。

- ・行動力に毎回感動と尊敬する。自分も負けなようにしっかりと行動していきたい。自ら学ぼうと思ってしていることはカッコいい。私もボランティアを始めるので、頑張ろうと思う。とても刺激を受けました。
- ・同じ学年の人たちがいろいろな活動を行っていることはとても誇りに思う。このような取り組みをもっと盛り上げていきたいです。

このように、仲間を相互に認め合う率直な感想が見られた。学生は義務感だけでなく、お互いに楽しみにしながらプログラム育心に参加したこともわかる。学生たちは、他の学生が日頃様々な活動を行なっていることについて、具体的な内容までは知らないようであった。発表を聴いて他の学生の活動の過程や詳細を知り、様々な学び方のヒントや発見を得た。いわば、学生相互が刺激し合い、相乗効果で、自ら学ぶ力を育てていたようである。“はぐくみ”に止まらず、学生たちの発表は、他の学生たちを刺激し、様々な活動の掘り起こしにもつながった。35期生が相互に育んだ企画力・行動力・協働性等は、それぞれの今後に生かされるものと期待している。
(森哲之・白石)

おわりに

本稿では、広島文教女子大学人間科学部初等教育学科35期生による自主サークル“はぐくみ”の活動を通して、教員養成における学生の主体的な正課外活動の意義について検討してきた。

“はぐくみ”のメンバーたちは、日常的な議論や様々な人との出会いを通して、教育観・学校観・子ども観の更新や、教師の専門性に関する理解の深化を進めた。その中で、教員養成を実

習体験や免許取得、採用試験準備に収斂してしまう姿勢を相対化し、教育・教職に対する理解を広げ、深めることの重要性を実感するに至った。教育とは何か、どうあるべきか、そして自分はどうすべきか。“はぐくみ”のメンバーは、そういう意味での教育学に自ら取り組み始めた。これに対して、教員は“はぐくみ”の正課外活動を受け止め、他の学生に広める支援を行った。本学の正課は、学びに対する学生たちの渴望と葛藤を生み出して、“はぐくみ”の原動力になった。しかし、大学の正課の役割がこれで十分とは思えない。正課の活動と正課外活動がうまくかみ合うことで、“はぐくみ”に見られたような学びをより健全に生み出せるように、教員養成課程の改良・追究を止めてはならない。

最後に、“はぐくみ”の総括として、本畝が卒業に際してまとめた文章を引用し、本稿を閉じることとする²²⁾。

教師になっていない私が声を大にしていうのは場違いかもしれないが、教師にとって大事だと思う2つがある。一つは「『今』と『10年後』を考えて教育をすること」、一つは「学び続ける教師であること」である。

なぜ、『今』と『10年後』を考えて教育をすることが大事だと言うか。子どもにとって「今」何をするのかはすごく大事である。また、「今」何が起きているのかということも大事である。[略] 保護者や教師、その他の大人も、子どもの「今」何をするのかを大事にしなければならない。この場合は、先を見据えてのことが多いと思う。

では「今」何が起きているのかに関してはどういうことか。「事実を見る」ことと同義であろう。[略] 理解しきれない他人同士である教師と児童の間で事実を正確に見ることは、互いの距離を近づけることに繋がるだろうし、適切な生徒指導にも繋がるだろう。

そして「10年後」が大事な理由は明白である。子どもが大人として社会に出るのは最も早くて小学校入学からおよそ10年後であろう。見通しのつかない「10年後」を想像するのは、難儀である。しかしながら、子どもがどう生きるのか、

どんな力があるのかを考えるとき、「今」の社会に当てはめて考えるのはお門違いであろう。子どもたちが大人になる時代を考えた設定でなく、時代遅れの教育になってしまうし、学校で習ったことは全く役に立たないと言われても仕方ない。

次に、「学び続ける教師であること」である。これは、私が大学1年生の文教教育学会で白石先生の演題からお借りした言葉である²³⁾。ここでは白石先生の言葉であるが、私の解釈を述べる。まず一つに大学4年間のカリキュラムのみで一人前の教師になることは無理である。自主的・主体的な学びを通してそれぞれが得るものや、教員研修や先輩教員からの指導で成長していく。そうやって教師が理想の教師を目指して日々自分磨きをしている姿をたくさん見た。そしてもう一つに、時代遅れの教育をしてしまわないように学ぶことである。「10年後」を大事にすることと繋がっていると考えている。

教壇に立つ日が近づき、不安な気持ちが増してくる。しかしながら、この4年間で得た学びはかけがえのないものであるし、これから始まる私の教員人生の土台となると確信している。

私は「今」と「10年後」を大事にし、学び続ける教師になりたい。

大学内外で私たちの学びを支え、協力していただいた方々に感謝する。この感謝の気持ちを胸に、未来の教え子を通して恩返ししていきたいと思う。

(白石・本畝)

注

- 1) 2019年の専門職大学・短期大学の創設、および中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」2015年12月21日に端を発する教職課程改革。
- 2) 例えば林 泰成・山名 淳・下司 晶・古屋恵太編『教員養成を哲学する』東信堂、2014年。
- 3) 岡本尚子・山下芳樹「小学校教員養成における正課外行事での教職能力育成の可能性」『立命館産業社会論集』第52巻第4号、2017年、83～96頁。
- 4) 山田 昇『戦後日本教員養成史研究』風間書房、1993年。
- 5) 本畝瑞歩「「はぐくみ」の流れと本畝の思い」2018年5月11日付レポート。以下、メンバーのレポートについては、明らかな誤字脱字、および用語の統一のためにのみ若干の修正を加えた。
- 6) 田邊日向子「はぐくみ論文（フリー ver.）」2018年5月11日付レポート。
- 7) はぐくみ「みんなの学校上映会・木村泰子先生講演会」（プログラム）、2018年3月10日、裏面。
- 8) 文教チャレンジとは、広島文教女子大学が2016年度から行っている、「学生自身が主体となって生き生きと活動し、個性的で魅力ある学生生活を実現できるような環境の醸成に寄与するため、他の学生の模範となる活発な課外活動に要する経費を補助するプログラム」（文教チャレンジ実施要綱第1条）である。
- 9) 例えば2018年8月2日・9月14日の大阪市長の発言。
- 10) 福田聡子「「はぐくみ」の取り組みを通した学び」2018年10月1日付レポート。
- 11) 峰谷日菜子「無題」2018年5月11日付レポート。
- 12) 森 望美「「はぐくみ」の取り組みを通した学び」2018年5月18日付レポート。
- 13) 田邊、前掲注6)。
- 14) 山本祐理「はぐくみの活動を通して学んだこと」2018年9月28日付レポート。
- 15) 森、前掲注12)。
- 16) 福田聡子「無題」2018年5月11日付レポート。
- 17) 森、前掲注12)。
- 18) 峰谷、前掲注11)。
- 19) 田邊、前掲注6)。
- 20) 森、前掲注12)。
- 21) 本畝、前掲注5)。
- 22) 本畝瑞歩「大事なこと」2018年12月25日付レポート。
- 23) 白石崇人「「研究」する教師・保育者の誕生—学び続ける明治期の先生たち」広島文教教育学会第31回定期総会、広島文教女子大学、2015年5月22日。35期生に対しては、後日、白石崇人「教師を捉えなおす②～主として歴史的・社会的視点から～(学び続ける教師)」(教師論第10回、2015年6月19日)でも強調した。